

# 岐阜県における「花の都ぎふ」運動とバラ

岐阜県立国際園芸アカデミー

上田 善弘

中部国際空港の開港、愛・地球博の開催と、本年の中部圏は話題に事欠くことなく、元気で活気にあふれていた。それに合わせ、岐阜県も数多くの観光客が訪れた。130年以上の歴史がある、長良川鶴飼には1997年以来の客があったという。しかし、すでに、愛・地球博後のことが危惧されかけている。というのも、名古屋は経済的に活気があってもそれに近い岐阜は、名古屋のベッドタウンという位置柄、取り残されたかの感がある。

それでも、花に関しては、県内可児市にある花フェスタ記念公園で大きなイベントが開催され、3月1日から9月中旬までの会期で、予想を上回る142万人の人が公園を訪れた。

この岐阜で、長年勤務した千葉大学を退職し、本年春に開校したばかりの岐阜県立国際園芸アカデミーに

勤務することになった。また、花フェスタ記念公園には設立された直後から関わっている。ここでは、これらの2施設と、これまで岐阜県で進められてきた花の振興についてふれる。

## 「花の都ぎふ」運動

この運動は、全国知事会会長として、国に積極的に発言し、この2月で岐阜県知事を辞められた梶原拓氏が進めてこられたものである。梶原氏は十数年前に知事に就任するとともに、本運動を始動された。

ちょうど15年前、大阪で国際花と緑の博覧会が開催されていた年に、県民に「夢起こし県政」推進のための「夢」が募集された。その結果最も多かった提案が、「人と自然の共生」に関するものであった。これはまさに、大阪花博の理念であり、それを継承するかのよ



花フェスタ記念公園の新しいバラ園を眺望する。片屋根の建物は花のミュージアム（2005年3月撮影）

うに「花の都ぎふ」運動は平成2年にスタートした。

この運動では、「花」をキーワードにし、「花かざり」「花づくり」「人づくり」を運動の3本柱とし、花を通じた地域活性化を進めて「日本一住みよいふるさとぎふ」の実現を目指している。運動の3本柱は、美しいふるさとづくり、潤いのある暮らし・豊かな心、花の産業振興を図ることにある。花の十徳が定められ、あらゆる花の効能が挙げられている。

例えば、心が豊かに（心の時代）、自然を守る心は花から、香り高い文化の創造、情操教育、生活を華やかに、老化の予防、花は文化産業（農林業の振興）など、各地で取り上げられている、花のキャッチフレーズはほとんどこの中に含まれるのではないだろうか。

具体的な活動としては、県内の街道や地域を花で飾ること（花木の植栽、道ばたの花壇など）、新品種開発（GIFUブランド）による花き産業振興、園芸福祉活動、日本的な花飾りとしての岐阜県独自の寄せ植え華道の普及、ヨーロッパで盛んなオープンガーデンの振興（オープンガーデン協会の設立）などがある。

実に、この間（平成2年から平成15年）に花の出荷額は、58億円から98億円に増加した。また、園芸福祉活動においては、現在、医療・福祉施設での園芸療法等の支援活動を行う登録された園芸福祉サポーターは185名となり、県内において活発に活動している。そして、これらの一連の花の都運動を象徴するものが、花フェスタ記念公園であり、運動の3本柱としての「人づくり」の中心を担っているのが、私が勤務する岐阜県立国際園芸アカデミーである。

## 花フェスタ記念公園

本公園は、平成7年に「Life with flowers」四季が彩る花かざり見本園をテーマに開催された、花フェスタ'95ぎふの開催とともに整備された公園である。開催イベントには異例の約200万人が訪れたということで話題になった。

岐阜県はバラ苗の生産日本一の県で、切り花バラの生産も盛んなことから、本公園はバラを目玉とし、日本一、東洋一のバラ園をもつ公園として名を馳せていた。イベント開催後、毎年整備され、本年で10年となる。本年は10年の節目として、ちょうど愛・地球博が開催されるということもあり、それに合わせ、大々的に整備が行われた。



バラ園内のテーマガーデンの一つ、ジョセフィーヌのバラ園

整備の主たるものは、バラ園を世界一のものにするということである。従来、世界一（ここでいう世界一はバラのコレクション数が世界一）のバラ園は、旧東ドイツ内、サンゲルハウゼンにあり、そのコレクション数は6,800種類。世界一になるためには、バラのコレクション数が、サンゲルハウゼンを越えなければならないということを進めてこられたのである。

昨年まで公開されていたバラのコレクション数は、約2,000種類ばかり、それがいきなり6,800種類を越えるのである。誰もが耳を疑ったのは当然である。約80haの公園の中で、従来のバラ園は2.5ha、今回新設されたバラ園が5ha、バラ園だけで7.5haとなる。

新設されたバラ園は、巨大な花のミュージアムを核とし、それぞれがテーマをもつ、14のテーマガーデンからなる。ミュージアムとバラ園はそれぞれ新進気鋭の若き建築家と造園家により設計され、彼らの独自の主張が込められたものとなっている。

花のミュージアムは片屋根形の建造物であり、傾斜のある屋根面は全面、イヌツゲとローズマリーで屋上緑化がなされ、側面は、自然光を取り入れるようガラス面とし、しかも紫外線から内部の展示物を保護するようにイペ材を用いた遮光が工夫されている。建物内は、バラの歴史、香り、花色の3展示コーナーと映像ホール、図書室を中心とする情報室、カルチャー教室などからなる。屋外のバラ園は、県産材により作られた回廊から見渡せるようになっている。回廊の壁面は当然のようにツルバラにより覆われている。

これだけのテーマをもったバラ園は、私自身、海外のどこでも見たことがなく、名実ともに世界一であることは間違いない。

花フェスタ記念公園では、1998年より、世界中から

バラの新品種を集め、バラの国際コンテストが開催されている。従来の日本バラ会が神代植物園で開催しているコンテストとは異なり、日本の気候に適した、耐病虫害性に優れた（ロウメンテナンス）一般に普及でき、修景用に使えるバラを選ぶことを主たる目的としている。春2回、秋1回、計3回の審査、さらには現場の管理者による経時的な病虫害被害状況や開花数調査を加味して採点される。このような厳密な審査は世界的にも例がなく、本コンテストは非常にレベルの高いものとなっている。ちなみに私は、コンテスト開催当初より審査委員長を務めている。

このようなバラ園を擁すること、世界的に高いレベルのコンテストを主催していることから、2003年には、世界バラ会連合より、本公園は優秀ガーデン賞を授与されている。

### 世界バラ育種会議

今春のイベントに合わせ、花フェスタ記念公園と岐阜市内長良川国際会議場で、世界5ヶ国7名の著名なバラ育種家を招き、世界バラ育種家会議が開催された。

このような会議を花フェスタ記念公園で開催することは、数年前、第一回の国際バラコンテストの表彰式の際に、ニュージーランドから有名なバラ育種家、マグレディ氏が招かれ、梶原知事とともに開催された会合から始まっている。この会合で、マグレディ氏が中心になって、本公園で、世界中のバラ育種家が一同に集う会議を開催したい旨の提案が、知事からなされた。この提案が今春、実現したのである。会議を予定し、バラ園内には「世界のバラ育種家コーナー」が設けられており、各育種会社でこれまで育成されてきた主な品種を見ることができる。

長良川国際会議場ではバラの生産者を中心としたバラの専門家を対象に、花フェスタ記念公園では一般の公園入場者を対象に、会議が開催された。そこでは、各社のバラの育種方針、各育種家のバラへの想いが語られた。現在、世界のバラ育種家が取り組み、目指している共通目標は、耐病虫害性と香りのバラ育種であることが、明確にされた。

また、花フェスタ記念公園での会議の前には、国際ローズコンテストを開催している環太平洋の国々（アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本）がバラの友好提携をし、交流を図ることを目的に各国代表間で友好協定調印式が行われた。

これらの世界各国のバラ育種家と代表者が集った一連の行事は、このバラ園が岐阜だけのものではなく、世界の遺産であることを岐阜県の関係者に認識していただくよい機会にもなった。さらに、これだけの短期間に世界有数のバラ園ができたことに対し、世界バラ会連合トミー・ケアンズ会長から梶原前知事に、その功績に対し感謝をこめて、会からゴールドメダルが授与された。

花フェスタ記念公園は、設立以来、総計250億円もの巨額の資金が注ぎ込まれており、今後如何にあるべきか、最近の指定管理制度もにらみ議論されている。

### 国際園芸アカデミー

「花の都ぎふ」運動の3本柱の一つ「人づくり」としての、国際園芸アカデミーの創立は、梶原県政の最後の念願であった。

本校は「花と緑の空間づくりによる健康でこころ豊かな生活の創造」の実現を目指し、平成16年に開校された専修学校であり、花フェスタ記念公園と同じ市内にある。

従来の専門分野の細分化が進んだ高等教育機関とは異なり、花と緑を総合的に捉えられる人材の育成に主眼がおかれている。具体的には、花と緑化木の生産から販売、装飾やデザイン、緑化、景観づくり、さらには園芸福祉・療法まで学べるようになっている。

学科は、短大卒業以上の学生を受け入れる4年課程の上級マスター科（各学年10名定員）と高卒以上の学生を対象とした2年課程のマスター科（各学年20名定員）からなる。

上級マスター科は、生産（生産、流通）、装飾（装飾、造園・緑化）および環境（環境・景観、癒し・利用）の3コースからなり、1年目はすべての分



国際園芸アカデミーの本館



国際園芸アカデミーの実習棟と温室。手前の庭は園芸療法実習園

野を学び、2年生以降に各コースへの専門に分かれる。

カリキュラムでは、座学1に対し、実習3と、実習を主に授業が組まれている。3、4年次には、インターンシップ（職場派遣）により、実際の企業、生産者へ派遣され、現場の技術習得、実践力の養成が図られる。前述の花フェスタ記念公園も学生の実習の場である。海外研修も必須となっており、本年、初めてオランダ、フランスの園芸視察、および園芸学校での研修が行われた。

この4月に就任してから半年ほど経つが、各授業で講義する学生は上級マイスター科で約10人、マイスター科で約20人。これが各コース・分野に入ると、3、4名前後、じつに少数濃密指導である。

各コースとも学生の机は、教室室と同じ広い空間の中にあり、常に学生と教官のコミュニケーションがとれるようになってきている。学生は気軽に授業のこと、将来のこと、何でも相談できる環境にある。平成19年4月には専任教官がすべて補充され、各コース3名教官の指導体制となる。

私自身は、これらのどのコースにも所属せず、共通分野に属し、園芸文化を担当している。他に共通分野として経営分野の教官が1名、計11名のスタッフが教鞭をとることになる。

これらの専任教官以外に、マイスター科の専任教官として、専任指導員が7名、指導課長は前花担当専門

技術員である。当校は海外研修もあることから、海外駐在経験をもつ優秀な3名の県職員も配属されている。これだけのスタッフをそろえた、花き園芸と造園分野に特化した教育機関は当校の他にないと思っている。

また、当校のある敷地内には、県の他機関である農業大学校、小、中、高の教員の農業、園芸研修を行うグリーンテクノ研修室もあり、緑に囲まれたたいへん恵まれた環境にある。

校舎は県産の木材を使った木造構造で、壁面はハンギングバスケットとコンテナ植栽により緑化されており、屋上には屋上緑化スペースもある。これらの緑化はすべて、学生の実習により行われ、シーズンにより入れ替えられる。

上記、人材育成部門の他に一般の方を対象にした生涯学習部門があり、花、樹木の栽培・管理からアロマセラピー、園芸福祉、造園設計、マーケティングまでの幅広い講座も担当し、年間の延べ受講者数は約2,000名となる。

以上、「花の都」運動とそれにより整備されてきた施設、活動を紹介させていただいた。これらの運動、施策は、すべて梶原前知事のリーダーシップのもとに行われてきたことであり、今更ながら、彼の存在を実感するばかりである。